

古典的功利主義の性道徳

結婚と売買春をめぐるベンサム、ミル、シジウィック

岡本慎平（広島大学）

性行為の規制は、古代から現代に至るまで道徳的議論の中心的課題であり、モーセの十戒における姦淫の禁止から、不倫や性暴力をめぐる現代のスキャンダルに至るまで、議論は尽きることがない。古来より多くの哲学者たちも性道徳を論じてきた。ところが、彼らの意見はしばしば大きく食い違う。「古典的功利主義者」として整理される 18-19 世紀イギリスの哲学者たち、ベンサム、ミル、シジウィックもその例外ではない。彼らはその理論的基礎が重なりつつも、性道徳について意見を異にしている。そこで本報告では、「正しい」性的関係の典型例としての結婚と、「間違った」性的関係の典型例としての売買春を中心に、彼らの見解を対比したい。

ベンサムは未刊草稿「男色論 (Paederasty)」で同性間の性行為の非犯罪化を主張するとともに、結婚制度のあり方や売買春の規制について功利主義的観点から議論を展開した (Sokol 2009, Schofield 2024)。ミルも 1830 年代の未刊草稿「結婚論 (On Marriage)」および 1869 年の『女性の隷従』において、結婚制度そのものを否定することはなかったが、結婚に伴う様々な規範を批判した (山尾 2018)。また、明示的に同性愛の擁護や売買春の禁止を主張することはなかったが、同時に彼は売買春を道徳的に間違った性的関係として否定的に言及する (Tunick 2024)。

それに対し、シジウィックは現行制度の弊害ではなく長所を重視する。例えば彼は『倫理学の諸方法』において結婚制度や売買春への非難を常識道徳の一例として扱い、その大部分を擁護する (Orsi 2012)。さらに、生殖をめぐる見解にも隔たりがある。ベンサムとミルが人口増加による将来世代の福利低下を強く懸念していたのに対し、シジウィックは結婚と生殖の結びつきが失われることによる人口減少を危惧している。

以上の論点をあえて図式的に表現すれば、革新的なベンサムと保守的なシジウィックのあいだに、折衷的立場としてミルを位置づけられるかもしれない。だが、もちろん時代背景、著作の性質、彼らの社会的立場、さらには理論的側面での相違を勘案する必要もある。三者の対比を通じて、功利主義における性道徳の多様性とその意義を明らかにする。

参考文献

- Francesco Orsi, (2012) “Sidgwick and the Morality of Purity”, *Revue d'études benthamiennes* (Online), 10.
- Schofield, P. (2024). “Jeremy Bentham on adult-child sex and infanticide”. *History of European Ideas*, 51(3), 513–528. <https://doi.org/10.1080/01916599.2024.2397599>

- Sokol, M. (2009). “Jeremy Bentham on Love and Marriage: A Utilitarian Proposal for Short-Term Marriage”. *The Journal of Legal History*, 30(1), 1– 21. <https://doi.org/10.1080/01440360902765415>
- Tunick, M. (2024). “J.S. Mill’ s Puzzling Position on Prostitution and his Harm Principle.” *Philosophy*, 99(1), 1–25. <https://doi.org/10.1017/S003181912300027X>
- 山尾忠弘 (2018) 「初期ミルにおける文明社会と女性：『女性の隷従』 の思想史的一源泉」『イギリス哲学研究』 41 巻, 33–51.